２０２３年８月２５日

①　第５８回全国壮年大会 主題講演

教会が元気になるには　～にもかかわらず、新しい共同体を求めて～

西南学院大学神学部　濱野道雄

　神学部の濱野です。いつも神学教育を支えていただき、心より感謝いたします。今回は「教会が元気になるには　～にもかかわらず、新しい共同体を求めて～」という題でお話をさせて頂きます。ただ、８月の初めに私は網膜剥離で緊急手術をしまして、実はまだよく見えておりません。それで今回のお話をまとめたり、再度データを確認したりする時間が十分とれませんでした。雑駁な話になっていることをお詫びいたします。

②　本日のアウトラインですが、このような流れで行います。どうぞ、お手許の資料でご確認ください。なお、より詳しい「目次」はそのスライドの最後のところに付けてありますので、ご確認ください。

③　まず初めに、教会と宗教の量的現状に触れます。量的、と申しますのは、教勢における人数や献金額の変化ですが、これが質的とは違うということです。重要ですが、これがすべてという事でもありません。

今回宣教室にもあらためてお世話になり、数字を計算してみました。ただし、コロナの影響はイレギュラーなところもあるでしょうから、それを除いた2010　→　2019で見てみますと、礼拝出席者数は－20.5％、経常献金は－19.5％ になっています。コロナ期もいれて2012　→　2021 で考えてみますと、礼拝出席者数は－33.5％、経常献金は－21.8％ になっています。ただし、コロナ期に多くの教会で開始されたリモート礼拝出席者が全員は含められておりませんので、参考までの数です。これは量的なもので、質的なもの、教会の良し悪しを語るものでは決してないのですが、しかし大きな変化が起こっていることは事実でしょう。

④　もう少し前からこれらの数字を見ていきますと、次のようなことが言えるかもしれません。

教会員数はバプテスト連盟以外の多くの教派も、２０００年ころから横ばいを始め、２０１１年頃から急減し始めています。しかし教派による違いもありまして、カトリックは人口に比例程度の変化です。持続可能な歩みをしているとも言えるかもしれません。最後にこのカトリックに学びつつ、しかしバプテストのアイデンティティを求めるということに触れます。それに対し日本基督教団は１９９０年代初頭がピークです。また日本同盟基督教団は２０１０年頃がピークで少しずつ減っています。

前提として、日本の人口のピークは２００８年ですが、その減少率を上回る教勢の減少は、次世代への「継承」が起こらなかったためと言えるかもしれません。

　また、これは慎重に申し上げるべきですが、神学的に所謂「リベラル」的傾向をなにほどか持つ教派から順に減少していると言えるでしょうか？　ただし「リベラル」とは何かを考える必要があります。それは個人主義の事でしょうか？あるいは教会外の人々と共に教会活動を始めているということでしょうか？

⑤　この教勢減少は日本の他宗教でも起きています。ご覧の通りですが、キリスト教と同じような数字で減っております。

このように日本の教会や宗教団体から人々が離れる一方で、SBNR、あとで申しますが、信仰を持ちながらも従来の教会や宗教団体には属さない人や、人生観を語るネットサロンや、平和や人権を求めるNPOに加入する人は増加しています。

今回考えてみたいことは、信仰そのものは前提として、信仰を持つ時に教会が持つ意味とは、共同体が持つ意味とは何か、そこで主体性を育まれるにはどうするのか、といったことです。

そして結論的に言いますと、「集める」だけではなく、同時に「出て行き繋がる」教会の可能性をさぐる必要があるのではないかということを申し上げたいと思います。それらを通して、バプテスト的に主体的信仰を育む教会とは何か、あらためて思いを巡らせてみたいと思います。

⑥　本論に入ります。最初に考えてみたいのは、宣教とは何か、なぜ宣教するのかです。もし先ほど確認した「量的現状（教勢）にどう対処するか」だけならば「組織維持」が教会の目的になっているとも言え、「これは本当に教会なのか」と思う人々は教会からさらに離れ、さらなる教勢減少を招くこともあるかもしれません。そこで、本日は「神の宣教に仕えること」を教会と宣教の第１の目的として確認するところから始めます。神の宣教は「ミッシオ・デイ」と呼ばれますが、戦後の宣教論の主流となった考え方です。戦前は「神　→　教会　→　世界」の順番で考えて、教会の働きだけが神の働きのように考えてきたところがあります。しかし戦後は「神　→　世界　→教会」つまり、神は世界で既に働いていらっしゃり、その働きに教会は参加させて頂くという考え方です。

⑦　例えば、ライトの『神の宣教』という本にはこうあります。「私たちは次のように尋ねる、「私の人生の物語のどこに神をあてはめるのか」と。だが真に問うべきは次のようなものだろう。「神の宣教の偉大な物語のどこに、私の小さな人生は置かれるのだろうか。」ライトによれば、神の宣教とはまず、「神は全被造物に自らを知らせようとする」ことです。「そのために神はイスラエルを選び、全人類と全被造物に祝福を届けようとする」、さらに「そのために神はイエスを送り、イスラエル同様に教会を建て、全人類と全被造物に祝福を届けようとする」のです。この神の働きの中に、神の物語の中に、それ自体完全なものではない教会が、招かれて参加していくわけです。

⑧　同じようなことを言っている人は少なくありません。例えばブルックマンは「台本」としての聖書の物語を言います。聖書は５幕からなる舞台の台本で、「創造→イスラエル→イエス・キリスト→教会（今、ここ）→終末」といいます。終末はまだ来ていないので、本当の答え、人々がどう生きて、どう信じていくのかは神のみが知っているのであり、本当の答えは教会だけが握りしめているわけではないと言います。そして「台本」と言われるのは、聖書は読むだけでなく、その物語を生きるものとしてあるということです。そこで聖書を読む私たちは「今舞台はどうなっている」「誰と生きる」「私たちは何者か」といったことを考えながら、行動し、語り、生きる訳です。

　そのように生きていくことが、私たちのキリスト者としての人生であり、そしてその中に教会形成も入ってくることを、これから申します事の大前提とさせてください。

⑨　その上で、先ほどの量的現状と関係するだろう、現代の教会の諸課題を整理してみたいと思います。

　最初に次世代の課題です。各会活動に参加している人数ですが、2012年から2013年で宣教部の集計方法が変わっているため、2013　→　2021　で計算してあります。それによれば、女性会や壮年会も減っているのですが、青年会で減り方は倍増して-33.4％、少年少女会で　-43.8％、小羊会で　-43.7％です。ここでは、確かに各会に入っていない教会員も増えたと思われますが、それでも次世代についての課題があると言えるでしょう。また若い人の人口が減っていることも確かにありますが、日本の総人口は-1.5％であり、１８歳人口は-7.3％で、これも確かにすごい減り方ですが、しかしそれ以上に教会からは若い人々が離れていることが確認できます。

⑩　ではなぜそのようなことが起こるのか、いくつかの様々な理由があると思います。しかし若い人々が世俗化して、信仰や宗教心というものを大切にしなくなったことが原因とはいえない、実は宗教を求める若い人は増えていることは、あとでご覧いただきますアンケート調査でも表れています。そうではなくて、SBNR（Spiritual But Not Religious）：霊的だが宗教的ではない、といった人々が増えてきているということも言えるでしょう。これは前世紀末より、人が集まらなくなった、共同体の重要性を感じなくなった北半球の教会で切実なテーマです、具体的に言えば、「神は信じるけれども、教会には行きたくない」「イエス様は大好きだけれども、礼拝には出たくない」といった「信仰」と「教会生活」の分離が起こっているということです。

　西南神学部でも、壮年大会でも話題になっていると思いますが、近年の神学生の減少にも関係しているのではないかと私は思っています。例えば、牧師になろうという献身者で、牧師家庭出身者が、西南神学部で現在８割です。それはこの人々には「信仰」と「教会生活」の分離が否応なく起こり得なかったためではないかと思うのです。逆に言えば、それ以外の若い人々では分離することがあり得るということです。

　にもかかわらず、やはり信仰と教会は本来分離しない、私たちは信仰をもって共同体に生きるのだ。ではその共同体はどのようなものか、それを本日は考えたいわけです。

⑪　このSBNRという現象は、アメリカやヨーロッパ、北半球の教会で世界的に起こっていることです。これは昨年の壮年大会で神学部のロドリゲス先生が示して下さったものです。左のグラフは、アメリカの教会や宗教団体に属する人が減ってきていることを示しています。真ん中のグラフは、それにもかかわらず、SBNR、特定の宗教団体には属さないけれども、霊的であったり、信仰自体を持ったりすることを大切にしている人の数が増え、現在４人に１人以上がそうなっているというグラフです。右側は西ヨーロッパの教会で、やはりアメリカと同様の現象が起きているとも思われます。

⑫　ここで起きているのは、信仰の崩壊というより、共同体性の「崩壊」ということなのだと思います。崩壊と言うとネガティブに聞こえますので、これをポジティブに言いますと、従来の共同体からの「解放」とも言えるかもしれません。ともかく共同体の捉え直しが北半球で起こっているのでSBNRが進んでいると言えるのだと思います。逆に南半球、アジア、アフリカ等ではまだ共同体は良い意味でも悪い意味でも強いですから、SBNRはそれほどすすんでいません。

　日本でも、コロナ期の経験は、私たちにとって教会と言う共同体とは何かを改めて問うたと思います。例えば、コロナ期以降、色々な教会の礼拝がインターネット配信され、自分以外の教会の礼拝に参加する人が増えてきたという課題もありました。「なぜ他の教会ではなく自分の教会のオンライン礼拝に参加するのか？」ネットで信仰が保てれば、どこかの教会共同体に属さない方が良い、楽だったり、がっかりすることもないと思ってしまった人も残念ながらあると思います。それは逆に言えば、教会側も、これまで共同体としての教会を大切にしてきたのか、「礼拝に出席したくても出来な人たちと共に生きる共同体をいかに形成しようと本気でしてきたのか？」が問われたわけです。主日厳守と従来言われてきまして、それは大切なことです。しかし現実に今、特に若い人やライフラインに関わる仕事をしている人の労働環境はとても厳しいもので、日曜日に働かずに教会にこられるのは、やはり恵まれた環境にあると言えるでしょう。

⑬　この現象を「宗教の個人化」とウルリッヒ・ベックは呼びます。そして教会と言う従来の共同体から離れ、しかも信仰を持ち続ける人はどこに行くのかというと、個人主義的になる人もいますが、そればかりではなく、別の社会活動等に参与していくと言っています。少し読みますと、「個人化が私人化につながることもありうるが、しかしそれは必然ではない。個人化が信仰の新たな公共的役割を開拓することも十分あり得る。（中略）脱私人化の例としては（略）、人権個人主義をあげることができる。この意味では、アムネスティ・インターナショナルは自分自身の神の現代における教会だといえる」といいます。

⑭ 東京基督教大学にあります宣教リサーチでは、このような人々を「所属無き信仰者」と呼んでいます。上のグラフは、自分には「信仰あり」という人々の推移ですが、冒頭で見た他宗教の教勢もかなりの勢いで減少しているにもかかわらず、NHKの調査ではこの２０年間、「信仰あり」の人は増えています。下のグラフは、年代別の「宗教心は大切」という人の割合ですが、やはりこの２０年間、２０代の人々においては増え続けています。

　従来、日本のキリスト者は人口の１％未満と言われてきましたが、それは教会籍がある人のことです。教会に属しておらず、しかし私にはキリスト教信仰があるという人も含めればどうなるか、色々な機関が調べていますが、大体２～３％になると宣教リサーチでは言います。ここに私は神の宣教の希望と、同時に信仰を持ちながら受け皿になれていない教会にも変わるべきところがあるということを感じます。

⑮　でも信仰を持つことの大切さは大前提として、何かの共同体に属することが信仰にとってどうして大切だと言えるでしょうか。

　今回の主題聖句にしていただきました創世記の言葉「人が独りでいるのは良くない」は、まさにそれを端的に表しているでしょう。これは男女の話しだけではなく、カール・バルトも言ったように、あらゆる人間と人間の話しでしょう。創世記を読みますと、神は光を創り「良し」と言われ、あらゆる命を創り「良し」と言ってくださいました。創られたこの世界はすべて「良い」のです。しかし「良し」ではないもの、それが初めて出てくる箇所がここです。「人が独りでいる」ことが「良し」ではない最初のものとして出てくるのです。やがてそれはアダムとイブが神と共に生きようとしない物語、そしてカインがアベルが共に生きることができない、それも家族と言うまさに共同体の中において、本当に共に生きることができない、最初の殺人が起こっていく、「良くない」物語へと展開していきます。ここには、神と共に生きるとは、人と共に生きることなのだというメッセージ、しかもそれはカインとアベルのように、ただとにかく我慢して一緒に居ればいいという意味でもないことが示されているのではないでしょうか。

　創世記だけではありません。イエスその人が、共に生きることを語り、実際に生きられました。それは現在、主の晩餐式になっている、イエスのすべての人との共なる食事に端的に表れています。また聖書の神はインマヌエル、共にいる神であり、マタイ福音書は最初から最後まで、イエスこそがインマヌエルを示すことを語り続けています。さらにヨハネ福音書などで芽生えてくる三位一体も、まさに聖書の神は創造主、キリスト、聖霊という交わりの神であること、共に生きる神であることを示します。

　このように聖書を読みますと、キプリアヌスが「教会を母として持たない人は、神を父として持つことはできない」といったことも、信仰者は共同体を必要とするという意味ではそうなのだろうとも思います。ただし、父と母という性別のメタファーは良くないです。そして、SBNRの時代、でもなんで信仰を持つことと、教会に行くこと、それも色々と問題も起こるかもしれない教会に行くことが、そこまで関係してるのか、実感できない気もします。

⑯　今回の講演の題は、私の牧師であり、天に召されました花小金井教会の藤澤一清先生の遺稿集からいただきました。藤澤先生らしい、そして私の心に大変訴えかけるタイトル『にもかかかわらず、教会を信じる』という本です。そこで藤澤先生は、戦前、戦後の日本の教会の戦争責任を語りながら、最後にこうおっしゃっています。「イエス・キリストは、どこに、どのような思いで、またどのような姿でおられたのか。にもかかわらず、あなたは教会を信じるのか。」「イエス・キリストは確かに教会におられたし、しかもおられる－十字架の姿において。ゆえにわたしは教会を信じる。」そう書いていらっしゃいます。

　「教会を信じる」と言う言葉は、使徒信条からの言葉でしょう。「我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、…を信ず。」です。これは誤りや限界が多い「教会を信じて、何でも言う事を聞く」のではなく、「聖霊が教会を建てること」を信じる、教会は人よってなったのではなく、神によってなったのだと信じるという事でしょう。

　今月、私は目の手術で、今も良く見えてないのですが、病院や自宅のベッドに伏せるときを過ごしました。そうするとあれこれ不安になってくるものです。そして「やがて、同じようにして死んでいくのだろうな」とまで思うようになりました。まあ、適応障害だったのだと思いますが、私にとってそれは紛れもなく不安であり、絶望であり、孤独でした。自分の声しか聞こえない時、人は行き詰るのかもしれません。その中、祈るとき、自分の外から声が届きました。イエス様が隣で語り掛けて下さる。そしてイエス様だけではない、イエス様のところに先に行った父と母も同じ道を歩み、繋がっていてくれる。妻が、子どもが、心配し、世話をしてくれる。教会の牧師が駆けつけてくれる。病床で見るリモート礼拝で教会の人が覚えて祈ってくれている。ああ、一人ではないのだ。同じ聖書の物語、不安ではなく信仰の、絶望ではなく希望の、孤独ではなく愛の物語に、この世界の現実に生きてくれる神が、人々がいる。他の方はどうか分かりません。しかし私にとって、私の信仰という命の道は、私だけでは支えきれない、そうではなく同じ聖書の物語生きる共同体によってこそ支え得られていることを改めて実感しました。

⑰ さて課題の最後に、日本の人口減少と少子高齢化も考えておく必要があります。これに関しては後ほど、もう少し考えたいと思います。

⑱　このような課題を抱えた現代の教会ですが、それに対して私たちはどう向き合うのか、私たちより先にこの現象に直面した北半球の教会ではどのように向き合ってきたのか、アメリカの教会像の変遷を手掛かりに考えたいと思います。

　戦後、アメリカの教会には大づかみに４つの教会像があったと言われます。リーダー中心型（60年代まで）、メンバー中心型（60年代～）、目的主導型（80年代後半から90年代～）、エマージング型（21世紀～）です。

⑲　まずリーダー中心型ですが、牧師が結局、あれこれ決める教会です。今も日本に少なくないでしょうし、教会開設期など、それが全て悪い訳でもありません。ただそこで求められてきた牧師像は、365日24時間対応する「出来る」牧師であったかもしれません。

　その課題を考えてみますと、最悪な場合ハラスメント発生するリスクがあります。また無牧師になった途端、教会の働きがストップするということもあるでしょう。そして牧師とその家族にだけ犠牲を強いるケースになるかもしれません。しかしそれは、イエスの教えた神の国のスタイルと同じではないと、私は思います。

⑳　次に組織中心型です。信徒の多数決で決める教会です。民主的で、バプテスト的でもあるでしょう。

　それでも課題を考えますと、多数決に入ってこない他の教会や地域には無関心になるケースも生まれるかもしれません。聖書的教会ならば、そうならないはずと思いますが、実際には教会の宣教を決める３つのニーズ「聖書のニーズ、地域や世界のニーズ、教会のメンバーのニーズ」に偏りがでることは、現実にみることです。

㉑　これらを踏まえて、目的主導型が出てきました。牧師や信徒という「人」ではなく、言葉で確認した目的で教会運営を決めるわけです。権威主義も、ポピュリズムも避けることが出来ます。

　しかし人のつくるシステムにはどこまで行っても課題があります。この場合、教会が定めて「目的」外の出会いに、小回りがきかないということも起こり得ます。あるいは宣教は神の宣教なので、人間が管理できないものをきれいにまとめすぎると、ある他のプログラムを、目的のための「手段」としてしまうことも起こり得ます。あるいはSBNRの時代に、その目的にあわない人は教会を去ることも実際、起こってきました。

㉒　そこでこの２０年程、ヨーロッパやアメリカの教会では教派を越えてエマージングチャーチということが言われてきました。エマージングとはこれから現れ出るということですから、連盟でもなじみ深い言葉で「これからの教会」と今日は呼んでおきましょう。

　しかしこれは「多様性」を重視するポスト近代の教会論なので、一枚岩ではありません。しかし大づかみに、そこには３つの流れがあるとマーク・ドリスコルは言います。１）適応派（ポスト近代社会の現実に合わせ、伝統を守る）、２）再建派（ライフスタイルを提示する教会）、３）修正派（リベラルな、対話的な神学の提唱）の３つです。

㉓　しかし、これらに共通する４つの特徴があると、北バプテスト神学大学のスコット・マクナイトは言います。ポスト近代であること（多様性が、教会と神学にある）。実践的であること（実際のライフスタイルを伴う信仰）。教勢拡張主義ではないこと（他宗教や、市民運動とも対話）。政治的なかかわりをもつこと（倫理や正義の重視）です。

　これらはポスト近代の考え方に特徴的なことなのですが、ポスト近代とは何でしょうか。それは２０世紀までの近代が「誰にとっても、答えは一つ」というものだったのに対して、ポスト近代は「誰が答えるかで、答えは変わる」と考えるということです。そこから、「なんでもあり」か「答えは神のみが知る」か、二つの態度が出てくるのだと思います。

㉔　このようなエマージングチャーチに対していわば「左右」からの批判がなされてきました。一方では保守主義からで「一つに真理や権威を定められないからダメ」と言われました。その一方でリベラルからは「ポストトゥルース（脱真実）であり、自分の真理を信じ込み、トランプ大統領を生み出すからダメ」と言われました。

　近年ではこの議論も落ち着いてきたと思います。例えばベイラー大学のグレイグ・ナッシュは「エマージングチャーチをまったく新しい教会と考えなくていい。今ある教会のプログラムの中で、異なる人が共に生きる世界を目指せば、これまでの教会で大丈夫ではないか」と言います。私も賛成しますし、また現実的だとも思います。つまり教会が、本来の教会、「狼が小羊と共に宿り」、全世界から全ての人が、罪人と呼ばれている人々が、招かれる場所としての教会であり続ければ、それで良いのだと思うのです。

㉕　ただこのエマージングチャーチは、一度キリスト教が根付いた欧米の教会の理論ですから、キリスト教が根付いたとは言えない日本でどうするのか、考え直さないといけないでしょう。日本における、これからの教会とはどうなるのでしょうか。以下、４つの可能性を考えてみたいと思います。

㉖　１番目に、これは具体的な可能性というよりも基調イメージなのですが、少しゆるやかな教会像ということです。リーダー中心型にせよ、メンバー中心型にせよ、目的主導型にせよ、どれも日本の教会にあると思いますが、それらはどこかに中心を、センターラインを定める教会像とも言えるかもしれません。みんなこうなるのだ、といった感じです。これからの教会像として考えてみると良いかもしれないのは、北海道などでよく見る「矢羽根」ではないかとも思うのです。みんなこうなるというより、ここからここの間で、あとは自由にやろうという訳です。なんでもありでもない、かといってみんな同じでなくてもいい訳です。そもそもキリスト教とは、教理とはこのようなガードレールのような幅を定めたものなのだと、フスト・ゴンザレスはいいます。

㉗　ただその二つの矢羽根を、あとで変える時があるとして、今どう定めましょうか。これもイメージになるのですが、ひとつは狭すぎないこと（みんな同じ、でもない）です。つまり、ついてこれない、ついていかない誰かを犠牲にして教会形成をするべきではない、ということです。その一方で、広すぎないこと（なんでもあり、でもない）ということです。広すぎて人の痛みに無関心になり始めたら、要注意でしょう。いずれにしても教会の真ん中には、十字架（痛み・弱さ）があるという、ごく基本的な教会観に立つのです。

㉘　それは例えば、ヨハネ福音書にも表れた「強さ」や、「同じこと」ではなく、「弱さ」を絆にした教会です。イエスの十字架を真ん中にして、女性たちと男性、あるいはLGBTｓ的とも言われる弟子が、ユダヤ人とギリシア人の教会を代表する人々が、家族となる。そこにイエスの霊が渡され、最初の教会が出来るのです。

㉙　では具体的はどのようなことが考えられるでしょうか。最初は、課題であった次世代の主体性を育む環境づくりです。バプテストの特徴は、自覚的信仰者とも言えるでしょう。その結果、神と人の間にはキリストしか立たないと考え、さらに、他の人に言われたからではなく主体的に教会形成を担うということが求められてきたでしょう。ここで「主体的になれ」と命令しても、主体性はできません。ではどうすれば主体性は育まれるのでしょうか？

原田神学生がこの春、福岡連合宣教会議のためのアンケート調査をしてくれました。そこで、信仰があると自覚している青年１３人のうち、教会奉仕に「主体的に関りたい」６名と半分を切っており、「関わりたくない」４名、「仕方なく、言われたから関わる」４名でした。近年次世代についての課題が語られる中で、どう次世代の人々と共同体をつくっていきましょうか。

㉚　ひとつはライフスタイルを見せる関係づくりが重視されるのではないかと私は思います。大嶋重徳さんが『若者と生きる教会』という本で、こう言っています。「このポストモダン社会において人間関係を構築するために効果的な方法としてEPICという言葉が紹介されます。EとはExperiential（経験的である）、PとはParticipatory（参加型である）、IとはImage‐driven（物語やメタファーでイメージを喚起する）、Cは、Connected（気の合う仲間とのつながり）です。こういう条件を満たせば、この時代の人々に効果的に福音を届けることができる、そして伝道も成功すると言われています。」

㉛　「若者たちにとっては、大集会の案内やチラシを幅広く配ることよりも、自分たちで同じ世代の若者を誘うことが最も効果的な伝道になっています。つまり、チラシを配って「ここに真理がある」と言われて、「なるほど、そうか」と思ってくるのではなく、＜だれが＞「ここに真理がある」というチラシを渡してくれたかが鍵になるわけです。」

㉜　「何が」を伝えるには、「だれが」が重要な時代とポスト近代時代と申しますか、現代はそうだと言えるでしょう。「キリスト者として生きるとは、このように生きることでもある」という一つの具体例を見せることです。「何が」つまり「聖書にはこう書いてある」「教会はこう運営する」という「理論」も大切です。しかしそこでは「だれが」つまり教会ではライフスタイルそのものが証しをするのだとも思います。「ああ、こういう人生は良い」と思われるか。そしてそもそも自分が教会生活に対して思っているのか、です。自らに嘘をついて演じて見せるのではなく、真逆で、福音に生かされ、時に迷う、本当の自分を、理路整然と論証するのではなく、そのまま見てもらう事で、証しする。その意味で「ゆるやか」で良いのです。このようにお互いに証し合う共同体ができれば、それがまさに信徒の教会ではないでしょうか。

㉝　このようなことを言っている人は複数で居ます。例えばフォースターは『世代から世代へ』という本で、信仰を形成する学習には３つのモードがあるが、その内、実践学習が、つまり教会生活を、他の教会員を見て学び、習慣化することが、近年の教会では行われなくなってきたことが、次世代の信仰が形成されにくい理由ではないかと言います。例えば、教会学校で、知識を学ぶだけでは、主体性は育まれないわけです。従来教会がしてきた、また出エジプト記にもあるようなカテキズム、対話を通して、教会で、礼拝で、「今、私たちは何をしているのか」説明することが、今の教会には重視されなくなったことが課題ではないかと言います。

㉞　同じようなことはハワーワスとウィリモンも言っています。若い堅信礼志願者に、「担当者」「教友」をつけ、「教会生活」（聖書を読む、礼拝、予算を知る、役員会に出る…教会に出会う旅、に共に出かけるわけです）を共に時間をかけて経験していく重要性が述べられています。カトリックの「代父」「代母」のようなやり方ですね。これは上から下への師弟関係をつくるのともまた違うと、ウィリモンは言います。実際に、２４歳の「担当者」が、１４歳の志願者に、対話の中で教えられるケースが本の中では紹介されています。

㉟　日本の教会ではどうでしょうか。例えば『１０代と歩む洗礼・堅信礼への道』と言う本はそのようなプログラムのガイドとして書かれています。

バプテストでも「小さな教会」としてのCSで、「対話」はなされているか、そして参加者の「ライフスタイル」が共有されるなら、十分それは起こると思います。理路整然として、一つだけの「正解」を見せるのではなく、戸惑いも、それでも誠実さも含めて、「素」を見せることでしょう。そして問われるのは、私は教会を「素」で喜んでいるか？日曜日朝起きて、教会にいきたい、「こういう生き方は良い」と自分で感じているか、だと思います。

㊱　主体性を育む環境づくりの２番目として、ピアグループ作りをあげます。ピアグループとは年齢・社会的立場・境遇などがほぼ同じ人たちで構成されるグループのことです。

岡村直樹さんはこう言います。「「自分は何者で、これからどう生きるか」といった質問の答えを求めつつ、若者のアイデンティティが形成される。…多くの若者はこの時期に、親を含めた権威者に対する反抗や葛藤を経て、それまでの「依存関係」ではない、心理的・情緒的自立を目指し、新しい関係性を求めるようになる。また親には打ち明けることの出来ない悩みなどの相談を、「ピア―」と呼ばれる同年代の友人関係に求め、彼らからのアドバイスやサポートを重視するようになる。」まさにここで主体性が育まれるわけですね。

㊲　「一方で近年、ユース期のアイデンティティ形成がうまくいかず、社会への適応や、特に安定した対人関係、またそれを構築するために必要なスキルを手に入れることの出来ない若者が急増していると言われる。」

岡村さんは、結論として、ラポール（疎通性、共感性）のある場を作る必要を述べます。

「クリスチャンリーダーが意図的にユースに対して「上から目線」で話すということは考えにくいが、「ユースに教えてあげたい」「彼らに良いアドバイスをしてあげたい」と願うあまり、権威をも感じさせる強い言葉で語ってしまったことが、かえって思春期の彼らの心を閉ざし、ラポールの形成を阻害する結果になってしまうことは十分考えられる。…「教え」、また「重要なアドバイスを与える」のは、ラポールの形成の後であるという事を認識しなければならないであろう。」

㊳　実際、ラポールはどこで形成されるでしょうか。まずラポール形成の場としての教会学校を、連盟でも大切にしてきたと思います。「教師と生徒」ではなく「リーダーとメンバー」と呼んだり、「共育」という言葉を大切にしてきた教会もあります。そこではリーダーは、自身の発表の場ではなく、ファシリテーター（引き出し、まとめる役）になるようつとめられてきたことでしょう。自由に語る場を作る訳です。これは教育学的にもとても大切で、聞いているだけで、メンバーが自分で語らないものは、理解できないからです。それはカール・バルトが、神が分かってから祈るのではなく、祈る時に神が分かると言っていることにも関係しているでしょう。

㊴　少年少女会に対して、リーダーを「伴走者」として位置づけたことも、ラポール形成の場としての各会活動を目指しての事だと思います。また次世代だけでなくて、班活動、ミッショングループなどのスモールグループもそうでしょう。

㊵　もう一つ、「パラチャーチ」的存在について考えてみたいと思います。パラチャーチは所謂「福音派」の用語ですが、具体的にはhi-b.a.やKGK等を指して使われもします。そこでは定期集会、特別集会、キャンプ、居場所提供などが行われます。各個教会からこれらに若い人を送り出し、そこがもう一つの場、チャーチではないけれどもパラチャーチとなり、ラポール形成がされたピアグループとなり、主体性が育まれて、また各個に帰ってくるという訳です。

　ただ「パラチャーチ」という考え方とバプテストの各個教会主義との関係はどうなるでしょうか。丁寧に位置づけをする必要はありますが、しかし実際、バプテスト連盟において、少年少女大会、青年大会等がこのピアグループの場になっていたのではないでしょうか。現在、連盟の機構改革の中、これらの継続した運営をどうするか課題になるでしょうけれども、これらに加えて、例えば福岡連合では、他の九州の連合に呼び掛けて合同で少年少女や青年の修養会を開くなどの新しい試みが始まっており、期待しております。

㊶　さて、ここまでは教会に集める、従来の方法の延長で考えてきました。集める教会は今後も無くなるわけではないので、重要と思います。それと並行して、SBNRの時代、出ていき繋がる教会も考えるのが良いのではないかと私は考えています。これも宣教リサーチの本からの言葉ですが、「見えない教会」形成です。「見えない教会」という神学用語があり、バプテストでは「見える教会」をこそ大切にしてきましたので、少しややこしいのですが、本日は、先ほど申しました、教会に所属していない人も含めたクリスチャンのことを「見えない教会」と呼ばせて頂きます。あるいは誤解を避けるために「出ていく教会」と呼びましょう。教会に属してる日本のクリスチャンは１％未満ですが、「私はキリスト教信仰を持っている」と自覚する人の数は、それぞれの調査でこのような数が出ています。

　そして宣教リサーチでは、右の図ですが、真ん中に礼拝出席者、その外に在籍会員の円を書き、ここまでを「見える教会」としています。その外にキリスト教信仰を持つと自覚する人を入れて「見えない教会」と呼んでいます。ここが日本人口の２～３％になり、教会籍が無い人の方が多い訳ですね。さらにその外にキリスト教学校卒業生、さらに何らかの信仰を持っている人をいれれば日本人口の３割になることをこの図は示しています。

　考えてみたいのは、ミッシオ・デイの考えのもと、この見えない教会の人々とどうつながるのか、「出ていく教会」をどう作るのかということです。繰り返しになりますが、見える、集める教会が大切であることは大前提です。それと同時に「出ていく教会」を考えるわけです。

　その際、問われるのは、これまでの「教会」の範囲を考え直してみること、教会における「契約」、教会の約束を再考することなのではないでしょうか。そこにネット会員、また牧師の兼職や、複数教会による一牧師招聘の可能性も現れてくるでしょう。

㊷　出ていく教会をも教会として位置付けるためには、少し発想の転換が必要かもしれません。バウンデッド・セットからセンタード・セットへの転換です。これはもともと数学におけるカテゴリーの２種類の作り方なのですが、教会籍がある、無いという枠で教会や契約を位置付けることがバウンデッド・セットと言えるでしょう。それに加えて、センタード・セットの場合、神の宣教の物語をセンターと位置付けるなら、それに沿った活動もまた教会と位置付ける発想になります。これはエマージングチャーチにおける一つの特徴でもあります。なんでもありでもなく、キリスト者としてのアイデンティティを大切にしながら、しかし教会籍を得させること自体を喜びはすれ最終目的にしない、神の国を求める緩やかな運動になっていくわけです。

㊸　バプテストは信仰共同体であり、契約共同体でしょう。信仰告白の言葉は各自違っても、教会で何を共にするか、「教会の約束」で一致するわけです。ここで考えてみたいのは、一教会で、全員「同じ」契約とすべきか？ということです。個々人の契約は明確に、しかし内容は違っても良いかもしれない。しかしもっと現実的に、現状よりより「緩やか」な契約にして、多くの人が入れるようにするかを問う方が良いかもしれません。例えば、コロナ期を通して、「ネット会員」をメンバーとするかという議論を、いくつかの教会で聞いてきました。日曜の教会堂で行われる礼拝に、様々な理由で来ることができない。その人とネットでだけ繋がる、それも一時的にそうだというのではなく、基本的にネットで繋がる会員として位置付けるべきか、という議論です。ここでは、礼拝堂に来る人と、ネットでだけつながる人を同じ教会員とする場合、教会の約束をより緩やかに考える必要も出てくると思います。実際、ネット会員等を中心とする「外の教会」「出ていく教会」と「中の教会」「集める教会」にそれぞれの牧師を置き、その複数牧会のチームで一つの教会形成をしていると思われるケースも聞くことがあります。

㊹　教会契約を緩やかにする、あるいは多様にするということからは、牧師の兼職や、教会自体が地域に溶け込んでいくというテーマも出て来るでしょう。その際、ただ経済的に、一時的に教会外の仕事をするというより、持続可能に、しかしクリスチャン、宣教者としてのアイデンティティを保ったまま、ライフ＆ワーク・ミックスがより積極的に考えられるか、ということです。実際、東京バプテスト神学校、九州バプテスト神学校の大きな可能性はここにもあるでしょう。

ただし、アメリカのバプテストでは兼職牧師が過半数ですが、日本の労働システムは変わりつつあるとはいえ、非正規雇用者に厳しいので、サポートシステム（奨学金や退職金や、立ち上げや横のつながりのサポート）を協力伝道で考えるべきではないでしょうか。

㊺　ただ具体的にどうするか、簡単でもありませんので共に考えていきたいと思います。特に日本は欧米や韓国などと違い社会的起業に対する法整備が遅れていることは課題です。たとえばNPOを教会で立ち上げたり、その働きに牧師が従事している教会はもうすでに実際複数であります。その可能性は今後も考えたいのですが、課題として、行政の下請け化、煩瑣な手続き、出資できないので事業性制限といったことがあります。現在、それらの課題に対する在り方として、ワーカーズ・コレクティブ（労働者協同組合）に期待を寄せる教会もあります。ただしこれらもまだ課題があるため、共に考える必要があるでしょう。

㊻　複数教会による牧師の招聘も考えてみましょう。所謂「兼牧」のことですが、「兼牧」は牧師からの目線になり、バプテスト的に教会からの目線で言えば「複数教会による牧師の招聘」となるでしょう。教会員の「教会契約」に「緩やかさ」「多様性」「包括性」をより重視するなら、牧師と教会の契約も、より多様に考えても良いのではと思うのです。このテーマでは従来、二重教会籍の件がネックとして語られてきました。ただ、複数の教会それぞれと「契約」を明確にするならば、そしてそれを複数の教会が協力伝道の事柄として喜べるなら、バプテストだからこそできるスタイルがあるのではないか、と私は考えます。

しかしより現実的に、実際には「一教会から他の教会への派遣」という形をとるものが多く、なじみやすいかもしれません。そこでもそれぞれの教会の「契約」は整理する方が良いと思います。

㊼　あと、「出ていく教会」を考える際には、今まで以上に学校、福祉施設との協働が必要になるでしょう。そこにこそ、キリスト教信仰を持っているものの、教会とどうつながっていいのか、その方法を「知らない」「考えたことがなかった」人たちが大勢生まれているからです。そして教会とつながらなくても、その人々にとってのキリスト教信仰でもって、実際に神の国を求める働きをしていく人たちが大勢卒業していっているからです。

㊽　時間が無いので、駆け足で行きます。このように共同体離れの時代に、もう一度何らかの形で、新しい共同体を形成していくためには、DE＆Iが教会には求められると言えるでしょう。ダイバーシティ／多様性・エクイティ／公正性＆インクルージョン／包括性です。DE＆Iが無い共同体は神の国と異なるものでしょうし、実際そこからは人々は離れていくことが明確になってきた時代です。

㊾　西南学院でDE＆Iの宣言が、この４月に出ました。「多様性を認め合う学院づくりに向けた宣言～西南学院ダイバーシティ、エクイティ＆インクルージョン推進宣言～」というものです。そこにはこうあります。「民族や国籍、宗教、文化、身体的・精神的特徴、価値観など、多様性に富む社会で、互いの境界を主体的に越え、他者を自分の隣人として受け入れ、互いの尊厳を守り、尊重しあうというダイバーシティ、エクイティ＆インクルージョンは、キリスト教精神に立脚する西南学院の教育理念に通底するものです。」

㊿　そして具体的に、文化的多様性の尊重、ジェンダー平等の促進。

51　ＳＯＧＩＥの多様性の尊重、障がいのある人への理解と支援、ユニバーサルデザインの推進をより進めていこうと、私もその委員会の委員になっております。

　これらが学校に求められていく時代になってきておりますが、学校でこうなのですから、ましてや教会はこのようなことに開かれていて欲しいと思うのです。

52　それは聖書がそのような世界を、神の「国」と呼び、そこへ私たちを導こうとしているからにほかなりません。イザヤの言う「狼と小羊が共に宿る」世界、イエスが実践したすべての人との食事、交わりに端的にそれは表れています。「異なるものがバラバラに」でも「同じものが共に」でもなく、「異なるものが、共に」生きる世界です、そしてバプテストは本来、それを目指していたのではないでしょうか。

53　具体的にどうするのか。それは今回すでに述べてきました、多様な世代と共に生きる時にも重要になってきます。

54　また少子高齢化のことを前で触れましたが、そこにも関係してくるでしょう。外国籍の人々と共に生きる教会です。

55　日本国籍者は減るのですが、外国籍者は増えているからです。そこでは外国籍の人々と共に生きる教会が求められると思います。

56　これは地方の教会でこそ今、否応なしに現実になってきているのではないでしょうか。都会ですと、同じ国の人々の教会ができもしますが、地方だとそうもいかないので、教会に集まっていらっしゃるからです。

ここには今年の入管法改悪を始め多くの人権課題も関係しています。まさに神の国を待ち望む教会のテーマでしょう。

57　そして入管法もですが、現在、私はもうニュースを見るのが嫌になるくらい、軍事にせよ、福祉にせよ、日本の政治と経済がひどい状況に進んでいることを思います。誰も舵をとらず、ただ暴走しています。それらの諸課題に、教会が、ともかく祈る、声を出す。それがどれだけ有効かは別として、祈り、語り合う。それぞれが出来る何かを一つする。このことに教会のDE&Iは関係してくるのだと思います。今の日本ではないもう一つの世界、神の国を生きようとする人たちがとにかくそこに生きている。そのことが重要に思えます。

58　また多様な身体・精神と共に生きることは、これまでも私たちの教会で大切にしてきたことと思います。ただ、十分にはこれまで理解されてこなかった、発達に関することなど、会って話しているだけでは分かりにくい所謂「障がい」について、合理的配慮をするテーマは、さらに掘り下げられるべきでしょう。

59　障がい者と教会委員会の冊子をもう一度、教会員で読み直すことも大切に思います。また昨年、西南の学生団体が、あまり理解されていない「障がい」も含め、当事者の声を聞き、合理的配慮の提案をまとめ、大変貴重な冊子になりました。そこには「合理的配慮とは、障がいのある人から、社会の中にあるバリアを取り除くために何らかの対応を必要としているとの意思が伝えられたとき、負担が重すぎない範囲で対応することをいう。」とあります。その冊子を読むとき、「講演型説教中心の礼拝」「詳細な資料の読み込みが必要な総会」等も、多数者への配慮だけで行われているかもしれないので、一度考えてみるべきだと思わされました。

60　さらには多様な性と共に生きる、ということですね。ジェンダー、LGBTｓのテーマです。

61　これは何かの流行ではなく、人権問題です。LGBTSの１０代の自殺未遂率は、それ以外の１０代の４．１倍です。

62　時間が来たので終わりますが、最後に、「これからの、少し緩やかな教会像」は何をもたらすのか？触れて終わります。

　結論ですが、「主体性を育むこと」と「出ていく教会」の二つを行いつつ、そして「DE&I」を兼ね備える教会形成をしてくことを求めるのが良いのではないか、ということです。

　先ほど、この二つの教会形成を２人の牧師で行っているケースだろうと思われるところもあると申しました。では複数の牧師を置けない教会の働きはより忙しくなるだけでしょうか？ですからここではセットで、連盟もそうですが、連合や、さらに近隣の３から５つ程度の顔が見える教会との協力伝道、そして牧師以外の「信徒」の働きの重要性は増すことも加えておきたいと思います。一人ではなく、一つの教会ではなく、フェアに、それぞれの賜物を活かしあうのです。

63　カトリックに学びつつも、「カトリック化」ではなく、バプテストの新しい可能性を求めてと書きました。日本のキリスト教でカトリックは持続可能な教勢推移をしていると最初に申しました。私は中高大学とカトリックでしたから、確かに影響を受けていますが、その良さと、課題を知ってもいます。私はバプテストの可能性をこそ追い求めたいと願っています。

64　その上で、カトリックから学べるものを考えてみますと、外国籍者に対して等に端的に現れますが、これまで述べてきた「緩やかさ」「懐の深さ」というものがそこにはあるのだと思います。

　ただ、カトリックの場合、神父と教会員の間には大きな距離があるのも事実だと思います。「緩やか」にしていくと、熱心な一部の人、牧師や執事と、その他の緩やかな教会につながる人々の二分化が起こってしまうかもしれません。

　よって前半で述べた「主体性を育む」こととセットで、公判で述べた「出ていく教会」も考えたいのです。

　駆け足で雑駁な話に、眼のせいとはいえなってしまい申し訳ありませんでした。ご清聴ありがとうございました。